

ストーリー

ここは『国際レスキュー工学研究所※』だ。この研究所では、レスキュー技術の評価と訓練のために、コンテスト形式で実験が行われている。研究所内には、大地震で倒壊した市街地を模擬した1/8スケールの実験フィールドが構築されており、いままさにレスキュー訓練が開始されようとしている。今回の状況設定は次のとおりである。

状況1) 瓦礫の中には実験用レスキューダミーが数体設置されている。

状況2) 二次災害のおそれがあり、人間が立ち入ることができない。

そこで、遠隔操縦のレスキューロボットの出動だ！ロボットから送られてくる映像を頼りに、一刻も早く、ガレキや障害物を取り除き、レスキューダミーを優しく助け出し、安全な場所まで運ぶことが任務である。

※今のところは、架空の研究所です。

競技の概要

舞台には左右二つのフィールドが用意されており、2チームが同時に競技を行ないます。しかし、その2チーム同士が戦うわけではなく、各チームが自己ベストを目指します。競技では、まず、プレゼンテーション(3分)を行ない、その後、作戦会議(3分)でフィールドを始めて見て計画を立て、そして、レスキュー活動(12または15分)を行ないます。

実験フィールド

市街地9ブロックの範囲を模擬した1/8スケールの実験フィールドの中に、要救助者を模擬したレスキューダミーを配置します。参加チームはコントロールルームから複数台のロボットを操縦して、ガレキや障害物を取り除き、レスキューダミーをロボットベースまで搬送します。

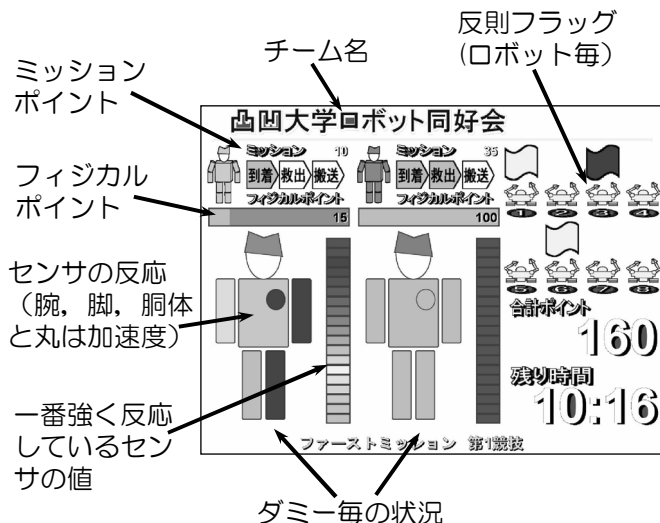
ロボット

ロボットには無線カメラが搭載されており、オペレータはフィールドを直接見ずに、カメラ画像だけを頼りに無線で遠隔操縦を行います。複数台のロボットは競技開始時にはロボットベースに待機しており、スタートとともに、ハイウェイと呼ぶ通路を通して被災区域内の現場に向かいます。ロボットには、貸与された無線カメラとラジコン送受信機だけを使うこと、競技開始時に全機がロボットベースの枠内に収まることが求められています。しかし、台数、寸法、重量、エネルギーなどには制限は設けられていません。自由な発想を促すために、できるだけ制限を設けないという方針です。

レスキューダミー(愛称:ダミヤン)

要救助者を模擬した身長29cmの人形で、感圧導電性フィルムが巻かれており、体をつかまれるとその力を検出することができます。また、転落等の衝撃も加速度センサで検出することができます。これらの検出値は電波でフィールド外のコンピュータに送信して常にモニタしており、過大な力や衝撃が加えられると、減点の対象となります。また、今年のは体重が重くなって、目が光り、ピーピー鳴くように進化しました！

画面の見方



舞台の見方(左側片方)

